

『父が自分の身を呈して教えてくれたことⅣ -在宅療養の日々-』

高名祐美

令和6年5月23日、父が亡くなって1年。1周忌の法要を、ゴールデンウィークに身内で勤めた。本来の命日5月23日は夫と妹家族でお参りした。もう1年、早いものだとやっぱり思う。

元旦の地震でお墓が損壊したこともあり、まだ納骨していない。父のお骨は仏壇にそのままである。石材店にお墓の修復を相談したが、順番待ちで取り掛かるのがお盆過ぎになると言われた。そこで地震後の生活も少し落ち着いてきたので、先日、夫と妹家族でお墓の修復をこころみた。素人ながら機械の力を借りて、なんとか元の形に修復することができた。素人でも道具を使って知恵と力を集結すればなんとかなるものだった。7月の母親の27回忌に合わせて納骨しようかと妹と相談している。なにかと妹家族と父のことで話をすることも多く、嬉しく思う。

今回は、父の28日間の在宅療養生活を振り返りたい。

Ⅳ 在宅療養というもの

病院で退院前カンファレンスを開いてもらい、退院日が4月26日と決まった。担当ケアマネは、私が信頼するNさん（MSW時代からの付き合い）にお願いした。Nさんは病院スタッフ、主介護者の妹、そして私としっかり向き合っていて、本人・家族の思いに寄り添うケアマネジメントを実践してくれた。Nさんが担当でよかったと心から思う。介護保険サービスは福祉用具（電動療養ベッド、褥瘡予防用マット、吸引器）のレンタル、医療面は医師による週1回の訪問診療、1日2回の訪問看護、訪問リハビリを週1回計画してもらった。

4月26日（水）退院当日。病棟からたくさんのNs、そして主治医の先生が父の退院を見送ってくれた。病棟看護師と訪問看護師が同乗して、寝たきりとなった父を病院救急車で搬送してもらった。自宅が病院から近いので5分ほどで到着。小雨降る寒い日だった。ストレッチャーで家に入った父は家だとわかったようなわからないような感じだった。病棟看護師が「お家に来ましたよ。」と声掛けすると、にっこりと笑った。周りのみんなも笑顔で迎えた。「今日からみんなと一緒にだよ。病室での一人ぼっち解消だね」、私はそう父に声掛けた。

準備した電動療養ベッドに父が落ち着き、私と訪問看護師はベッドサイドに

腰をおろし、父を見守る。妹家族はケアマネさんやこれから関わってくださる支援者さんたちとサービス担当者会議に出席し、これからのことを話し合った。医師から病状の説明を聞いて、父に残された時間がそんなに長くはないと妹と確認しあっていた。その残された時間を少しでも楽に、家族と過ごすことができたらと願った。

その後、病院では面会できなかったひ孫たちもお見舞いにやってきた。私の夫も大きな花束をもって、「退院おめでとうございます」とやってきてくれた。沢山の人に祝ってもらった在宅療養スタートの日。私達が決めていたのは「最期まで自宅で看ること。もう入院はしない。」そのことをみんなで確認し、会議は終わった。そして家族だけの時間。点滴が栄養源の父は食べれないけれど、みんなで退院祝いの宴をひらいた。

MSW時代に在宅療養への支援は数多く実践してきたが、今回は自分が在宅療養支援を受ける当事者となった。体験してまず思ったのは、在宅療養が『贅沢』だということだった。看護師が自宅まできてくれて、父ひとりのためにめいっぱいその時間を費やしてくれる。病院では病棟内に複数の患者さんがいて、ケアに費やす時間は限られてしまう。ナースコールを押しても、タイミングよく看護師さんがきてくれることもままならなかったりする。それで父も寂しがって、妹や私に電話をかけてきたりしていた。家では、訪問看護の時間は看護師さんを独り占めできる。体をていねいにふいてもらったり、髪の毛を洗ってもらったりする。看護師さんは父や私達介護者の不安を受け止め、要望にもしっかり応えてくれる。「なにかあったら、家だとすぐにきてもらえないから心配」と在宅療養を戸惑う声をよく聴いていたが、その不安も取り越し苦労である。電話で相談すると確実に対応してくれ、ときに緊急訪問も。看護師さんが家にきてくれるだけで安心できることを実感した。そして状態確認後、担当の先生へ連絡し、指示をあおいでくれたりする。医師の指示で追加の処方がでたりすると、病院にもどって再び訪問してくれたりする。「贅沢すぎる」と思った。

とはいうものの、在宅介護はなかなか大変だった。父の場合、食事介助がなく、排泄ケアも尿バルーン留置だったので、ケア量は少ないほうだった。主介護者となる妹は、入院中に介護指導を受け、おおかたのケアはほぼ完璧。ただ、吸痰だけは「怖い」というので私の担当となった。それでも私の手技では限界がある。訪問看護で時間をかけてしっかり痰を吸引してもらった。そして点滴を毎日。一日の介護スケジュールは、訪問看護の時間を基本にして作成され、そのとおりに実践。実施したケア内容を日誌に記録した。

一番大変だったのが父の要求に応えることだった。少しでもそばを離れると

「寂しい」とブザーを押してくる。妹夫婦、妹の次男が交代で父のそばにいることになった。妹は家事をしながら、妹の夫は仕事にいきながらよく付き合ってくれていた。妹の次男も祖父の介護に協力的だった。仕事をやめてから引きこもり気味だったこの息子が、訪問看護師さんと会話し、祖父のそばにすわって母を助けるようになった。この変化は大きかった。介護は一人だけではできない、そう強く思った。交代できる人がいること、みんな同じ気持ちで関わること、それが大切だと思った。

痛みへの対応として処方されている医療用麻薬の量が徐々に増え、寝ている時間も多くなっていった。そしてせん妄がひどくなっていった。昼夜逆転、状況がわからない、急に怒り出すなど・・・それでもひ孫が来ると、嬉しそうに手を出して握手したり、頭をなでたりしている。日が続つにつれ、妹の介護疲れが顕著になってきた。交代を申し出るが「わたしは大丈夫」と自分のペースを崩そうとしない。妹は「わたしの家族だから」「わたしたちはわたしたちの生活のペースもあるし」「自分たちのペースでこれからもやっていくつもり」と、姉の出る幕はない。それがとても寂しく思えた。私の父でもあるのに。私だって父のために精一杯したいと・・・しかし私は他家へ嫁いだ人。現在の家族に任せるしかないと自分に言い聞かせた。

これで最期かと思った局面が2回訪れた。1回目は5月1日。父が家族を自分の周りに集めて、ラストメッセージを伝えた。声がうまくだせず話ができないので、ホワイトボードに書いてくる。

「家を守ってほしい」「家族みんな仲良くしてほしい」。みんなで父を囲んで「わかったよ～」「みんなで守るよ」と口々に応えた。

2回目は5月17日の夜。自宅にいた私に、妹の夫より電話。「お義父さんの溶体が悪い。病院にも連絡したのですぐに来てほしい」と。夫と急いで実家へ向かった。妹がパニックになっている。みんなが父の周りに集まっている。

妹：ねえちゃん、お別れや。お別れのハグ、いっぱいしたよ。ね、よしおちゃん。
（泣きながら父の顔をなでている）

看護師：先生に状態報告しました。脈も弱いのでいよいよかもしれません・・・私もずっとついていきますから。みなさんもそばにいて、声をかけてあげてください。

私：家に帰ってきて3週間たったね。帰れてよかったね、みんなと過ごせたね。

孫（私の長女）：じいちゃん、小学生のときいつも病院につれていってもらったね。駐車場で車の停め方、教えてくれたよね、ありがとう。

私の夫：お義父さん。お義父さん。いっぱいしてもらったね、ありがとう。

孫（妹の次男）：じいちゃん。ようがんばったな。みんなで仲良くやな、わかったぞ。

妹の夫：お義父さん、みんないるよ。家、守るから。自分に任せて。

と口々に声掛け、父の体をさする。緊急訪問してくれた看護師もそばにいて血圧をはかったり脈をみたりしてくれている。

看護師：先生に状態報告しました。いよいよかもしれません・・・私もずっとついていますから。みなさんもそばにいて、声をかけてあげてください。

そこへ遠方にいる孫（妹の長男）から電話。

孫（妹の長男）：じいちゃん！清孝やぞ。

（その声が聞こえたようで反応がある）

孫（妹の長男）：じいちゃん、俺と一緒に酒のむんやぞ。お盆に帰るからそれまで頑張れ。えいえいおーやぞ！

「えいえいおー」に家族に笑いが起きる。その言葉と家族の笑い声で父は目を開け、瞬きし、みんなの顔を見た。手にも温かさが戻ってきた。緊急訪問してくれた看護師が血圧をはかる。

訪問看護師：血圧、上がりました。バイタル安定してきています。

みんなが口々に「すごいぞ！」「復活した！」と歓声をあげる。

父は孫の電話で復活し、訪問看護師はいったん帰ることになった。

この日は持ち直したが、その後徐々にレベルダウンしていった。

（次回に続く）